

「今日の説教、聴き手のために」 2008/8/3 明治学院教会(123)

(このプリントは毎週作っているものです)

岩井健作

「不条理の中の神」

ヨハネ第一3章1節～12節

- 1、かつてk教会の祈祷会で、あるご年配の婦人が娘さんのことを証して語られました。娘さんは37歳で、専門職の仕事もこなし、二人の子供^{こども}としっかり育て、理知的で、意志的な生き方をされていて、宗教とは無縁の生活でしたが、乳癌の手術・再発・危機の中で、近くの教会で洗礼を受けました。そのときのテープを聴かせて下さったのですが、自分の存在を改めて、神との関係存在として捉え、「神の愛」とのかかわりを表明されたものでした。心に残ったのは、そのかかわりが、残された時の中で、「だんだんと」深まってゆくであろうと感じているという部分でした。
- 2、そのような信仰の生き方を、ヨハネ第一の手紙3章2節は表現しています。「愛する者たち、私たちは今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となることを知っています。……」。「既に神の子」というのは聖書の基本的告げ知ら(福音)せであり、それへの応答が信仰告白です。パウロは「神の義、信、恵み」と、ヨハネは「神の愛」と表現しました。問題は、「自分がどのようになるかは、まだ示されていない」と時間経過の中での生をしっかりと見据えて、やがて「御子に似た者となる」という希望を持って生きているという部分です。希望は不条理な歴史を歩む支えです。「救い」を知識として悟ることはどうしても受け身の生き方になります。ヨハネの論争相手とヨハネの違いは、歴史(不条理)にかかわる積極性の違いでした。
- 3、ヨハネ書簡は当時のグノーシス派の信仰理解に反駁した書物です。グノーシス(知識)派は、「救い」を「知識・悟り」として捉えました。時間経過の中で熟成してゆくものとは捉えませんでした。だから覚知が大事だったのです。ヨハネは「救い」はイエスの戒めを守って、歴史の中を生きること、互いに愛し合うことのなかで、「御子をありのままに見る」時に向って生きる希望が大事でした。「時に向う」とは終末論的に生きるということです。
- 4、「神の愛」という大きな出来事について、3章1節は「考えなさい」と言っています。「考える」という営みは時間の流れを生きることです。その経過の中で、最後には本当の姿が分かる、これはヨハネ書簡の特徴です。親の葬儀や記念会の時に、しみじみと親の姿が見えてくることがあります。いわば、終わりから見えてくる、終末論的存在とでもいうのでしょうか。世界・社会・人生には不条理なことがいっぱいあります。しかし、その不条理を生きることのなかに、イエスに示されて神がおられます。